

Title	<紹介> 文草の会 『菅家文草注釈 文章篇 第一冊 卷七上』
Author(s)	合山, 林太郎
Citation	語文. 104 P.78-P.79
Issue Date	2015-06-30
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/70965
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

文章の会『菅家文章注釈 文章篇 第一冊 卷七上』

合 山 林 太郎

本書は、日本古代漢文学において最重要人物と目される菅原道真の漢文学作品に、注解及び現代語訳を付したものである。具体的には、彼の別集である『菅家文章』巻七に収録されている散文五十三篇の各篇について、翻刻と訓読のほかに、「解説」「題意」「校異」「押韻」「語釈」「通釈」の項目が設けられ、それぞれについて詳細な記述がなされている。これに加え、賦・銘・贊・祭文・記・序・書序・議といった巻七所収作品の文体に関しても、「文体解説」の項目が設けられ、中国古典文学の中で道真作品の位置付けが明らかにされている。また、巻末には、語釈において立項された語を検索できる「注語索引」と、「人名索引」とを付し、読者の便を図っている。

本書の第一の意義は、難解な道真の散文作品に、はじめて本格的な注解を加え、研究の基盤を提供した点に求められよう。本書の「はじめに」においては、「今、道真の作品の研究は、詩に比べて他の文体については、はなはだ遅れていると見受けられるが、それは、我々が用いるテキストのありように一つの要因があるのではなからうか」と記されている。まさにその通りであり、道真の漢詩については、川口久雄氏によって編まれた『日本古典文学大系七二 菅家文章・菅家後集』（岩波書店、一九六六年）があ

るものの、漢文については、なお基礎的文献が不足している。すなわち、大曾根章介氏、金原理氏、後藤昭雄氏らの校注による『新日本古典文学大系二七・本朝文粹』（岩波書店、一九九二年）や後藤昭雄氏の手になる『本朝文粹抄（一）（二）（三）』（勉誠出版、二〇〇六、〇九、一四年）などにおける『本朝文粹』収録作品についての注釈以外に、頼りとすべき理解のための道標がない。そのような状況のなか、道真の漢文に網羅的な理解を付与する本書は、研究の進展に大きな貢献をなすものと言える。語句の出典や研究の沿革を、一目のもとに知ることができることが、どれほどありがたいことであるか、まずはこの点を強調しておきたい。その上で、本書を繙いて驚かされるのは、その注釈の綿密さである。とくに「解説」や「語釈」の項においては、一つ一つの語句や表現について、その出処が明示されるとともに、関連する様々な領域の最新の研究が紹介され、読者を確実な作品理解へと導いている。

具体的な例を示そう。たとえば、「書齋記」は、道真が自らの書齋について、それを父から受け継いだ経緯、その位置や様相、さらに書齋に「闢入ひらく」する人々と彼らに対する歎きを述べたものであり、詩人道真の精神のあり様を示すものとして、高山樗牛や徳富蘇峰をはじめ、多くの人々によって検討がなされた作品である（大曾根章介「書齋記」雑考、『王朝文学論攷』岩波書店、一九九四年）。本書では、この文章の読解に際して、従来の研究の蓄積を周到に踏まえつつ、さらに知見を付け加えられている。

たとえば、冒頭の解釈には、従来、その影響関係が指摘されている白居易の「池上篇」とともに「冷泉亭記」が引かれ、表現法の類似について言及されている。このほか、見過ごしがちな述語などについても、平安漢詩人たちの用例が多数挙げられ、精緻な解釈が施されている。

また、近年の研究を踏まえつつ、新解を提示したものもある。

「崇福寺綵錦宝幢記」は、宇多天皇による崇福寺宝幢の修復の経緯について述べたものであるが、この文章における「辛未之年（天智十年）」という語については、従来、崇福寺の創建の年と関わりを持つものとして考えられることが多かった。しかし、本書の注釈者の一人でもある滝川幸司氏は、この語について、天智遺愛の品を崇福寺に施入した年と見るべきであると論じ、この文章を、天智天皇の系統に属する宇多天皇の立場、あるいはその意図という観点から捉えるべきであると説いた（「天智系としての宇多天皇―菅原道真「崇福寺綵錦宝幢記」をめぐる―」『菅原道真論』塙書房、二〇一四年）。本書における同作品の注釈及び現代語訳は、このような考察を踏まえたものとなっている。

本書は、文章の会という研究グループによる成果であり、この点も注目すべきである。会のメンバーとしては、北山円正氏、後藤昭雄氏、滝川幸司氏、本間洋一氏、三木雅博氏（五十音順）のお名前が挙がっているが、こうした平安漢文学研究の第一人者が、二〇〇六年から月一回検討会を開催し、八年の月日をかけて成ったのが本書なのである。聞くところによれば、会では、一つの作

品を幾度も読み返し、稿を成した後も議論を重ね、様々な解釈の可能性を考えるといる。各注解には責任執筆者の名が記されているが、その記述には、複数の専門家が集まり、熟慮しつつ意見を闘わせることで得られた奥深い理解が反映されている。今まさに参考とすべき、理想的な研究のあり方と言えるのではないだろうか。

書名に「第一冊」と記されていることから、本書がその続編を企図していることは明らかである。今回、その複雑さゆえに注解の対象から外された、巻七所収の詩序についての注解の刊行が待たれる。

文章の会がより大きく発展し、古代日本文学研究の新たな基礎を築かれることを祈念してやまない。

（勉誠出版、二〇一四年九月、五、四〇〇円）

（ごうやま・りんたろう 本学大学院准教授）